

山陰歴史館蔵『無題歌合集』について

渡邊 健

(米子工業高等専門学校)

摘要

本稿では、山陰歴史館蔵『無題歌合集』について調査・分析した内容を報告する。本書は米子市立町の鹿島恒勇家旧蔵で、平成二十年に山陰歴史館に寄贈された同家の和歌資料の中の一つである。当時、鹿島家和歌資料の調査に当たられた原豊二氏が、『山陰研究』第三号にその概要を報告されており、本書についても、幕末の米子歌壇の活動の実態を把握する上で重要な資料であることを指摘されている。(幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために)平成二十二年(二月)本書は、嘉永六年(一八五三)から安政二年(一八五五)正月頃にかけて、主に米子の豪商・鹿島家で行われた二十度の歌会・歌合を記録した書物であり、一〇一四首の歌が収められている。歌数が多く、また癖の強い読みにくい文字で書かれているため、なかなか資料として利用されてこなかったが、稿者の所属する「米子高専古文書の会」が平成二十八年十二月から本書の解読を進め、このほどその作業が完了した。『米子工業高等専門学校研究報告』第五五号(令和二年三月発行予定)に、翻刻本文に解題を添えて掲載する予定であるが、本稿ではこの作業に関わった者の立場から、本書の内容と資料としての性格について、基本的な整理と考察を試みた。

キーワード・鹿島家 鹿島長行 米子歌壇 類題和歌集

一、書誌、書写者について

本書は、米子市立町の鹿島恒勇家(鹿島本家)旧蔵本で、現在は米子市立山陰歴史館の所蔵である。(米子市教育委員会整理番号「C1 MG 〇二二三三、〇二二三二」、整理書名「無題和歌集」)本書は外題・

内題共になく、書名が明らかでないが、この書物を最初に調査・報告された原豊二氏の呼称に従って『無題歌合集』と呼ぶことにする。^[1]

本書は袋綴(紙縫綴)一冊の写本で、縦二八・〇糎×横二〇・二糎、大本よりやや大きな書型である。表紙は本文と同じ楮紙で題簽はな

く、何も書かれていない。（写真1）本文は一〇二丁で遊紙はなく、第一丁目表から一〇二丁目表までに二十種の歌会・歌合が記され、一〇二丁目裏が裏表紙となっている。本文は一面八行、和歌一行書きを基本とし、歌の後にその作者の名のみ記す。（写真2）八九丁目以降は、紙数が残り少なくなってきたからか、和歌と和歌の間に「左」「右」や勝負付を記しており、無理に詰めて書写しているような印象を受ける。（写真3）

本書には、幕末に主に鹿島家で行われた二十度の歌会・歌合が記録されており、それぞれ次のように、冒頭に歌会・歌合の月日、場所、判者等が簡潔に書かれている。（便宜上、収録された順に丸数字を付す）

- ① 神無月朔日略会詠歌青々庵
- ② おなじく十九日略会 滄廼舎
- ③ おなじく廿八日略会虎嘯軒くさく
- ④ 霜月二日略会 日孝
- ⑤ 兼題 橋上霜 古蔭撰
- ⑥ 兼題 鷹狩 古蔭喜蔭両撰
- ⑦ 兼題 閑居夢 古蔭撰
- ⑧ 兼題 馬 古蔭撰
- ⑨ 兼題 冬暁月
- ⑩ 網代 寄山恋
- ⑪ 埋火 寄山恋
- ⑫ 題 立春 社頭松
- ⑬ 雪中若菜
- ⑭ 山家鶯

⑮ 田家梅

⑯ 九月末つかた 喜蔭撰

⑰ 遠山雪 喜蔭武彦両撰

⑱ 喜蔭武彦両評

⑲ 題 朝落葉 炭竈 橋 喜蔭評

⑳ 兼題 立春 喜蔭武彦

本書の総歌数は、重複歌を含め一〇一四首である。右のうち、⑪の末尾に「嘉永六とせのうし」と記されているので、それぞれの歌会・歌合の行われた時期が判明する。①～⑪までは嘉永六年（一八五三、癸丑）の十月から十二月、⑫～⑲は嘉永七年（十一月二十七日に改元して安政元年）、⑳ は月日は記されないものの、⑰・⑲の歌合が主に冬題であるのに対し、立春から始まる四季題で歌が詠まれているので、年の明けた安政二年正月のものではないかと考える。

本書の保存状態は決して良くはなく、経年による汚れや本の傷み、若干の虫損はあるものの、本文の解読に支障のある箇所はなかった。

本書の書写者は、その筆跡から見て、鹿島本家九代の長行と認められる。⑧～⑫の歌合の本文の後には、「追加」として判者・小谷古蔭の詠歌が一、二首記されているが、他の短冊類に見える古蔭の書体とは違い、長行の筆跡である。また⑩の末尾には、「口上をしるす」として、終わりに「古蔭」とある文章があるが、これも長行の筆跡で、文字通り古蔭が歌合後に口頭で語った内容を長行が書き記したものである。（写真4）

長行が本書を記した目的は、鹿島家で行われた歌会・歌合の記録であることはもちろんだが、表紙に何も書かれていないことから明らかになように、おそらく公開や二次利用を意図してのものではなく、私的



写真1

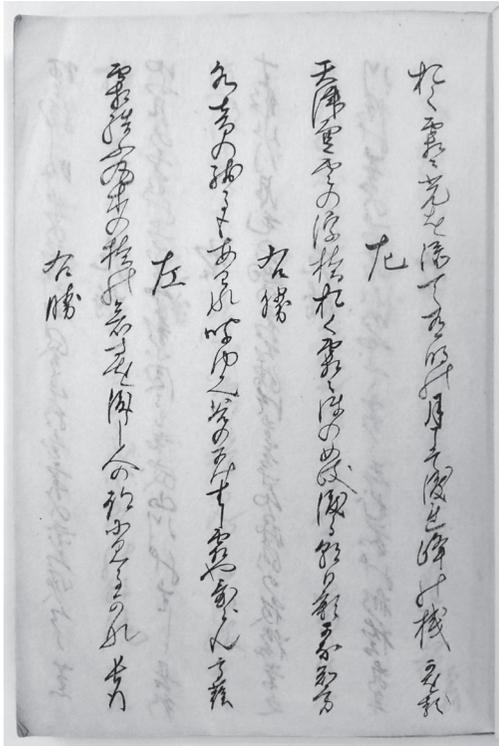


写真2

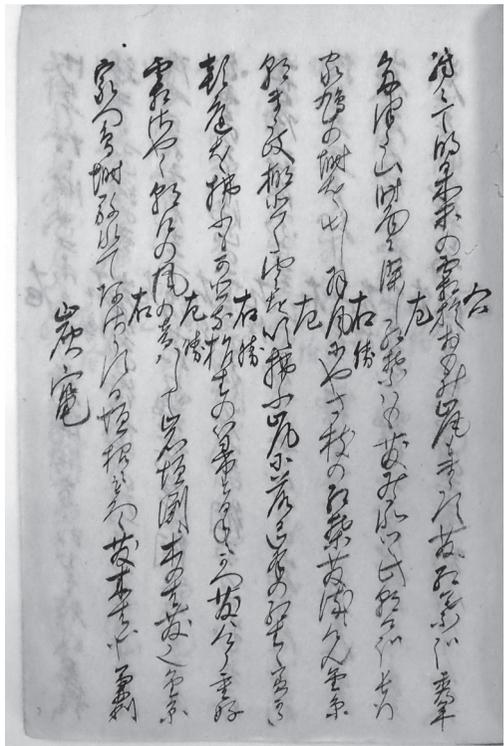


写真3

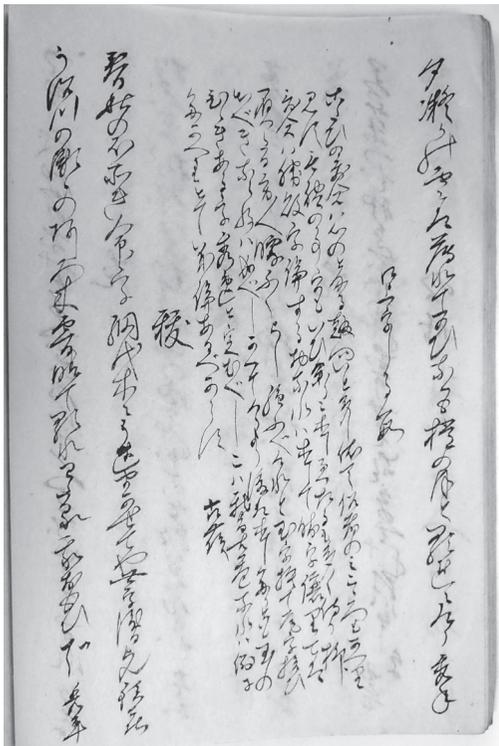


写真4

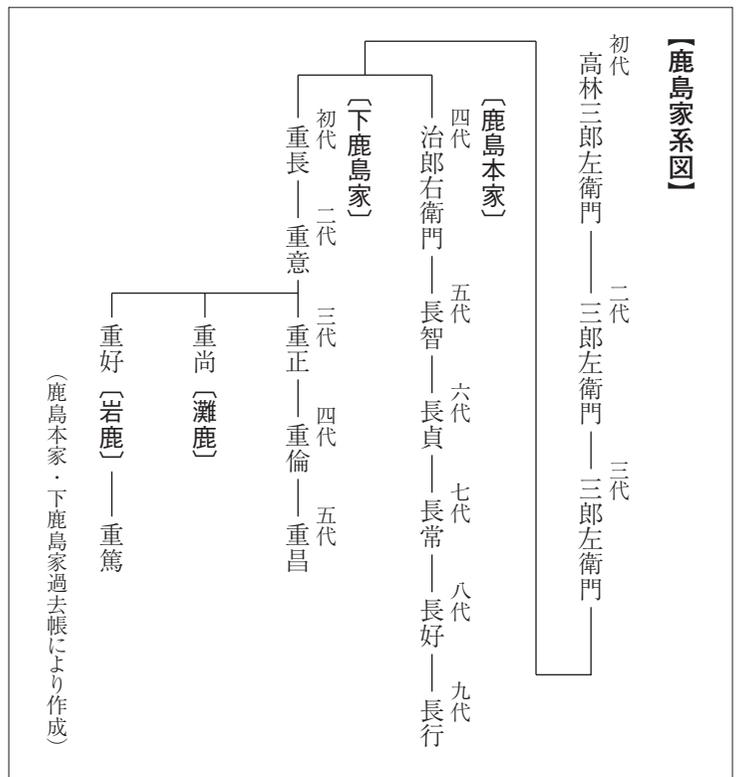
な備忘録といったものであったのだろう。一方、嘉永六、七年に長行は二十、二十一歳とまだ若く、和歌を本格的に詠み始めたばかりであったと思われる。それゆえ本書には、和歌の初心者らしい誤字・脱字が少なくなく、文字や書写態度もややルーズだと感じられるのであって、本書を資料として利用する際にはそうした点に注意が必要である。

二、鹿島家と鹿島長行について

鹿島家はもと備前岡山の商人で、江戸時代初期に米子の立町に定住するようになり、後に米子を代表する豪商となった。米子城家老・荒尾氏の信任を得て米子の町年寄役を務めるなど、町政面に果たした役割も大きい。鹿島家は本家と分家（下鹿島家）が協同して米穀・質屋・為替・田地開墾等の事業を行い、巨富を蓄えるだけでなく、米子城四重櫓の修復に関する入用金調達をはじめ、幕末期に藩財政の窮乏を度々救い、また凶作時に米子の各町へ米銀を救恤するなど町政に貢献している。

鹿島家の家訓は奢侈や文芸を好むことを戒めていたが、五代長智の頃から風雅に親しむ風を生じ、和歌・俳句・茶道等に優れた者を輩出するとともに、鹿島家は幕末頃の米子でそれらの活動を庇護する文化メセナの役割を担った。和歌においては、鹿島本家五代・長智が紀州の歌人・国学者の本居大平の弟子となっており、『類題鯁玉集』第五編に歌を一首採られている。上の系図に見える者では、他に鹿島本家の長行・下鹿島家の重正・重尚・重好が全国的な類題和歌集の歌人である。

【鹿島家系図】



鹿島長行は鹿島本家九代目で、天保五年（一八三四）～明治二八年（二八九五）、六十二歳。安政年間（一八五四～一八五九）の終わり頃に家督を継いだと見られ、分家の重倫や重好と共に米子の町政や藩財政の窮乏を救うために貢献した。諸芸に通じる中でも特に和歌を好み、長行の記した歌書類や蒐集した短冊類等が鹿島本家や山陰歴史館に所蔵されている。長行はまた茶道にも深い嗜みがあり、鹿島本家には嘉永三年（一八五〇）～明治八年（一八七五）までに長行の記した

『云席控』（鹿島家茶会記と呼ばれる）二冊が残されている。鹿島家内外で行われた茶会の記録であるが、当時の鹿島家の交際の範囲が後藤・三好・大谷といった米子の有力商人だけでなく、出雲や京・大坂の商人・僧侶・士分にまで及んでいることが分かる。

長行の和歌について当時の類題和歌集を見ると、『類題鯉玉集』には見られず、嘉永七年刊（二八五四）の『類題鴨川集』五郎集に八首、安政四年刊（一八五七）の『類題採風集』二編に五首。安政二年刊（編集は嘉永七年頃）の『類題稻葉集』には一首も採られていない。『稻葉集』は編者が鳥取藩内の歌人に広く歌の提出を求め、序に記すとおり歌人とはいえない者も多く混じっていること、下鹿島家の重尚が一五首、重好が一一首採られていることを考えれば、長行が当時二十一、二歳と若年だったことを差し引いても、歌人としての評価は劣るものであったのかもしれない。

長行は嘉永六年から安政年間にかけて和歌的著作を多く残しており、その大部分が現在山陰歴史館の所蔵となっている。その主なものを挙げると、まず、今論している『無題歌合集』に関連する資料として、嘉永六年十一月六日の『歌合』（同館整理番号C1MG〇二二二）がある。『無題歌合集』の④の歌会を歌合に編み直し、小谷古蔭の加判を得て成ったものである。⁵次に、長行が安政四年刊の『類題採風集』二編に和歌を投稿した際の編料が二種類あり、『甲寅夏採風集二編料 詠草』（同〇二四〇）が草稿段階、『採風集二編料』（同〇二二二）がそれを整理したものと思われる。後者は和歌二二〇首を収めるが、米子歌人で『採風集』二編の序を書いた中林古樹が添削や合点を付しており、地方歌人が全国的な類題集に入集するまでのプロセスを知る資料として注目される。他に、長行の作歌のための手控え

帳と見られるものに、『和歌雑集』（同〇二二七）があり末尾に「嘉永六とせの春」とある。内容的に共通しつつ、これを整理したと見られるのが『和歌 長行』（同〇二二六）である。

このように、長行は嘉永六年～安政年間にかけて多くの和歌資料を残しており、この頃最も歌道に熱心だったようである。これらの資料は、幕末の米子歌壇の活動を把握し、また地方歌人と当時の全国的な類題和歌集との関わりを知る上で重要なものであり、今後さらに調査が進むことが期待される。

三、歌合の判者について

『無題歌合集』に収められた歌合のうち、小谷古蔭は⑤～⑬の十一度（ただし⑥は佐々木喜蔭と両判）で判者となり、それ以後は⑯で佐々木喜蔭、⑰～⑳では喜蔭と中林武彦の二人が判者を務めている。以下、各人について人物と歌人としての事績を解説する。

○小谷古蔭

小谷古蔭は因幡の国学者・歌人で、文政四年（一八二二）鳥取粟谷天王神社の神職の家に生まれた。⁶若くして、本居大平の門人であった飯田秀雄に国学・和歌を学び、その才を認められた。弘化元年（一八四四）紀州に赴き、加納諸平（柿園）に学ぶとともに、『類題鯉玉集』第五編（弘化二年（一八四五）刊）、第六編（嘉永四年（一八五二）刊）の編集に助力した。後に安政四年（一八五七）紀州藩国学所学頭代に任命されるが、万延元年（一八六〇）鳥取藩に召還されて国学方手伝となり、更に文久元年（一八六一）には国学家業に召し出される。その後の経歴は省略するが、国学よりは和歌を専らとし、当時の類題和歌集には多くの歌が採られている。

加納諸平編『類題鯁玉集』には、第四編（天保十二年（一八四二）刊）に一三首、第五編五二首、第六編一六首、第七編（嘉永七年（一八五四）刊）三首。長澤伴雄編『類題鴨川集』には歌が採られないものの、伴雄編『鴨川詠史集』の初編（嘉永六年（一八五三）刊）一首、二編（安政二年（一八五五）以前脱稿、大正二年（一九一三）刊）一首。熊代繁里編『類題清渚集』（安政五年（一八五八）刊）五五首。佐々木弘綱編『類題千船集』初編（安政元年（一八五八）刊）一首、二編（元治元年（一八六四）刊）一首。鈴木重胤編『近世名家歌集類題』（天保一四年（一八四三）刊）五首。鳥取の歌人の歌を集めた『類題稻葉集』（中島宜門編、安政三年（一八五六）刊）への入集は一四首とやや少ないが、幕末の頃に小谷古蔭は、全国にもよく名の知られた歌人であっただろうとすることができる。

古蔭と鹿島家とはかねて親しい交際があり、下鹿島家の邸内にあつた「青々庵」にしばしば滞在していたらしい。江戸後期から明治初期に青々庵を訪れ、あるいは招かれた文人雅客がそれを讃えて詠んだ漢詩・和歌・俳句等を集成した「鹿島家青々庵之書画帖」が残されているが、古蔭は弘化二年（一八四五）十二月頃に「あるじ」（おそらく下鹿島家三代の重正）の依頼を受けてその序文を書いている。同書画帖の中に、青々庵の庭の景を賞美して詠んだ「翠園六勝」の歌があるが、その末尾に、「右翠園六勝は嘉永五とせの冬より春かけて青々庵にこもり居てよめる也けり 高階古蔭」とあるのは、小谷古蔭のことであろう。また、鹿島本家の所蔵する短冊帖に、

古蔭君のかへり給ふに別れをおしみて

いまはとて君いそぐとも立花の香おりとゞめよ軒の朝風 長行
という和歌短冊があり、長行と古蔭との親交をうかがわせる。

以上、古蔭の歌人としての経歴と鹿島家との交流を見てきたが、古蔭が鹿島家歌合の指導者として招聘されたのはやはり、加納諸平門下の著名歌人としてその力量と声望が与つて大きいのだろう。諸平のもとの『類題鯁玉集』の編纂作業に深く関わっていた経験が買われ、鹿島家だけでなく、全国的な類題和歌集に投稿する者の増えていた米子歌人からの強い期待に心える形で、古蔭の指導が実現したのだとみたい。

○中林武彦

中林武彦は『無題歌合集』①・③の歌会に歌人として参加しているが、その後は出詠はなく、⑱⑳の歌会で佐々木喜蔭と共に判者を務めている。荒尾氏家臣の医師であり、『鯁玉集』二編の作者姓名録に「武彦 伯耆米子医師 中林玄備」、『鴨川詠史集』二編の作者姓名録に「武彦 伯耆米子 中林玄備」とある。他方、『鴨川集』太郎集の作者姓名録に「古樹 伯耆米子 中林元亭」という、『無題歌合集』の作者であり、前節で述べた鹿島長行の『類題採風集』の添削をした中林古樹が見える。『鯁玉集』によつて二人の活動時期を見ると、武彦は天保四年（一八三三）の第二編から、古樹は第五編からその歌が見え始める。また、武彦は第六編の雑部に「六十賀しける時」の詞書を持つ歌が採られており、すでに高齢であることから、古樹の父であつたと考えられる。

武彦は『鯁玉集』第二編二首・三編一首・五編一〇首・六編三首、『鴨川詠史集』二編三首、『類題稻葉集』一六首が見え、米子歌人の中では比較的多く類題和歌集に歌が採られている。鹿島家とは交流があり、下鹿島家の重正（号は翠舎）に子が生まれたときは、

鹿島翠の舎の御本に玉なすをのこ生れ給ふほぎに寄松祝といふことを

末遠くさかえんまつはふた葉よりはやも千載の色ぞ見えける
という歌を詠んでおり、同家の重尚の四十賀のために作成したと見られる和歌短冊帖には、

きみがへむよはひの数は一声に千世をこめたる田鶴ぞよむ蘭

の歌がある。武彦は、和歌の力量が認められ、父子で鹿島家の歌会・歌合に参加していたと見られる。

○佐々木喜蔭

佐々木喜蔭は文政九年（一八二六）生まれで没年は未詳、米子勝田神社（現米子市博労町）第十五代禰宜であった神職・歌人である。因幡の加知弥神社の神職で国学者・歌人であった飯田秀雄に和歌を学び、「門脇重矩と共に米子地方歌壇の重鎮であった」とされる。『鯁玉集』第四編一首・第五編一〇首・第六編一首・第七編一首、『鴨川集』太郎集一首、『稲葉集』一七首が採られている。鹿島家歌合で中林武彦と共に判者を務めているのも、米子歌人の中で実力が群を抜き、高く評価されていたことによるものと思われる。喜蔭と鹿島家との交流をうかがわせる資料としては、下鹿島家の重正の四十賀短冊帖に、
ながらへむ君がゆかりの色なれや千よ松がえのふじの花ぶさ

重尚の四十賀の折のものに見られる短冊帖にも、

千代しめて雲井に遊ぶ芦田鶴のこゝろや君が心なるらむ

という喜蔭の歌が見られる。喜蔭が鹿島家から米子を代表する歌人として重んじられ、扱われていたことをうかがわせる。

四、参加歌人について

『無題歌合集』に収められた二十度の歌会・歌合に参加した歌人のうち、名を記された者は三三人に及ぶ。その他に「名しらず」「飛入」

と記される歌が計九首あるから、実際にはもう少し多い人数が参加していたのかも知れない。本書では、その歌の作者は姓はなく名のみ記されており、参加した歌人の多くは素性の分からない者である。ただし、当時の類題和歌集に歌が入集していたり、他の資料等によって姓や該当人物を特定できるケースもあるので、以下作者の属性ごとにその概略を説明する。

（商家）

○鹿島重正

鹿島分家の下鹿島家三代で、文化一三年（一八一六）～安政四年（一八五七）。『鳥取県大百科事典』の鹿島重正の項には、「翠屋と号し、当時の米子歌壇の重鎮であった」とする。歌集ではないが、自筆の詠草上下二冊（山陰歴史館所蔵）があり、残された短冊類も多い。『類題鯁玉集』第三編の「作者姓名録」（天保一二年（一八四一）刊）を編集したことはよく知られている。おそらく刊行にかかる費用も提供したのであろう。歌の作者としては、『鯁玉集』第四編に三首、第五編に七首が採られている。

○鹿島重好

下鹿島家二代重意の四男。重正の異母弟で、天保元年（一八三〇）～明治二五年（一八九二）。分家して岩倉町に邸を構え、「岩鹿」と号した。歌集の存在は知られていなかったが、最近、米子市立図書館に自筆本の歌集の写しがあることが発見された。その詠歌は『鯁玉集』第六編三首・第七編一首、『鴨川集』三郎集五首・四郎集一三首・五郎集一四首、『鴨川詠史集』二編一四首、『類題採風集』二編六首、『類題稲葉集』一一首に見える。同族の長行とは年齢が近いこともあり（重好が四歳年長）、幼少の頃から竹馬の友ともいうべき親しい間柄で

あった。¹⁴

○大谷兼烈

大谷氏は米子灘町の商人であり、廻船業や魚鳥座の経営で財を成した富豪である。一族から多くの歌人が出ているが、全国的な類題集に名が見えるのは兼烈と友愛であり、兼烈は鹿島家と交流が深く、歌会・歌合にも頻繁に参加している。『鴨川集』四郎集の作者姓名録には「因幡藩伯耆米子住 大谷兼烈」と見え、和歌は『鰻玉集』第六編に一首、『鴨川集』四郎集三首・五郎集一首が採られている。

○三好秀興・秀年

三好氏は米子日野町・道笑町に同族の店を多く持った富商で、分業して米穀・醸造・小問物・油・塩・砂糖等商売は多岐に及んだ。当時の類題集には、秀興（秀興）・秀年・秀顕・秀篤の名が見える。『鴨川集』四郎集の作者姓名録に「秀興 伯耆米子 三好久五郎」「秀年 同人男 三好慶三郎」とあるのによれば、秀興と秀年は父子関係ということになる。秀興は『鰻玉集』第五編九首・第六編一〇首・第七編一八首、『鴨川集』四郎集六首・五郎集四首、『鴨川詠史集』二編一首・『採風集』二編五首、『稻葉集』九首と、米子歌人の中では比較的多く当時の類題集に歌が採られている。秀年は『鴨川集』四郎集三首・五郎集一首、『採風集』二編四首、『稻葉集』四首である。

(七分)

○村瀬鎮喜

村瀬家は米子城家老・荒尾家の家臣団の重臣で、村河家に次ぐ家格であった。六代鎮栄は十八世紀後半の米子の学芸興隆の中心人物であり、当時の米子歌壇の重鎮であったとされる。¹⁵ 第八代鎮芳の男が鎮喜であるが、詳しい伝記等は分からない。鎮喜の和歌は『鰻玉集』六編

三首・七編二首、『稻葉集』五首が知られる。

○森知方

森知方は『採風集』二編作者姓名録に「知方 伯州米城 森雅楽」とあり、荒尾氏の米子詰家臣であったのではないかと思われる。『鰻玉集』六編一首、『採風集』二編六首が入集している。

(医家)

○中林武彦・古樹

武彦については第三節で既に述べたが、古樹と父子関係であったと思われる。古樹は『鰻玉集』第五編七首・第六編五首・第七編二首。『鴨川集』太郎集四首・次郎集三二首・三郎集一二首・四郎集二六首・五郎集三三首。四郎集では巻軸歌の作者となっており、非常に重んじられていたことが分かる。『類題採風集』に歌は採られていないが、古樹が同集二編に序文を寄せていることは注目に値する。第二節で見たように、古樹は鹿島長行の『採風集』二編の投稿歌を添削・選歌していたが、同集には長行の歌が五首採られ、すべて古樹が添削した形の本文で入集している。同集初編に米子歌人の入集はなかったが、二編では八人に増加していることを考えると、古樹は序文を書くだけでなく選歌にも与り力があつたことをうかがわせる。『稻葉集』には二一首が採られており、米子の内外で名を知られ、力量・評価共に高い歌人であつたといふことができる。

○片尾常之

荒尾家臣の医師であり、¹⁶ 『鰻玉集』第四編作者姓名録に「常之 伯耆米子医師 片尾安長」、『鴨川集』四郎集作者姓名録に「常之 伯耆米子 片岡安肇」とある。¹⁷ 『鰻玉集』第四編一首、『鴨川集』四郎集四首・五郎集三首、『稻葉集』三首入集している。

(神職)

○門脇重矩・重固

重矩は『鰻玉集』第四編作者姓名録に「重矩 伯耆米子神主 門脇愛之助」と記されるように、米子天神町にあった稻荷神社の神職であり、重固はその男である。会见郡渡村(現境港市渡町)日御碕神社神職の門脇家の分家であり、重矩は幕末の国学者・歌人として著名な門脇重綾の姉・登美を妻としていた。¹⁸⁾重矩は『鰻玉集』第四編四首・第五編三首、第六編四首、『稲葉集』八首入集。佐々木喜蔭と共に、幕末の米子歌壇の重鎮であつたとされる。¹⁹⁾重固は『鰻玉集』第六編一首入集。

(僧侶)

○日孝

米子寺町の実成寺第二十一代の住職で知足庵と号した。『鴨川集』

表1 鹿島家歌会・歌合 一期(嘉永六年十月一日〜十一月二日)

番号	種別	歌数	月日	場所	題	作者(登場順)
①	歌会	二三首	十月一日	青々庵	(全員) 初冬(以下各人一首) 秋時雨・閑居時雨・山家時雨・田家時雨・月前時雨・風前時雨・旅宿時雨・浦鶴啼月・寄太刀恋・猿・蟹・夜風似雨・妓女対鏡・閑居水音	兼利・日孝・古樹・重好・兼烈・建比古・武彦・常之・豊正(九人)
②	歌会	二〇首	十月十九日	滄廼舎	(全員) 霰(以下各人一首) 湊千鳥・枯野眺望・田水・池鴨・冬月・滝・橋・旅行友・落葉煙・草庵雨・閑	兼烈・常之・日孝・兼利・重好・古樹・長行・豊正・建比古(九人)
③	歌会	二七首	十月二十八日	虎嘯軒	(各人一首) 寒夜衾・橋上霜・水郷舟・江寒芦・炭竈・冬月・寒草・早梅・牛・磯波・冬夜・閑居夜雨・海路日暮・旅宿・川・寄竹祝(全員) 雪	日孝・冬人・兼烈・古樹・常之・兼利・建比古・重好・武彦・長行・重固(十二人)
④	歌会	二九首	十一月二日	(実成寺か)	埋火・冬田・遠村鶏	兼烈・日孝・重固・豊正・常之・重好・建比古・兼利・長行(九人)

山陰歴史館蔵『無題歌合集』について(渡邊 健)

四郎集の作者姓名録に「日孝 伯耆米子 実成寺」とある。『鴨川集』四郎集七首・五郎集九首、『採風集』二編一八首、『稲葉集』二首入集。(その他)

今回は調査が及ばなかったが、鹿島本家所蔵和歌短冊帖や下鹿島家旧蔵(現山陰歴史館所蔵)の和歌短冊帖・短冊類の中に名の見える者として、兼利・豊正・建比古・美堅・貞明がいる。今後、他の資料に徴して該当人物を特定できるように努めたい。

五、歌会・歌合について

本節では、『無題歌合集』に収められた二十度の歌会・歌合について、その活動の実態を分析・考察する。これらはその実態から見て、次の三期に分けて把握するのが妥当であろう。

左の表をもとにこの期の特徴を述べると、第一は、すべて歌会が行

われており、①～④はみな本文では「略会」と書かれていることから、細かい作法や形式を省略した、寛いだ雰囲気の歌会が催されていたと考えられることである。

第二は、歌会の開かれる場所がその都度異なっており、おそらく参加者の持ち回りで歌会が行われていたのではないかと考えられることである。このうち、場所が明らかなのは①の青々庵で、米子灘町の下鹿島家の邸内にあった。「庵」とあるが、先に触れた「鹿島家青々庵書画帖」に収められた漢詩や和歌およびその前書きの内容から判断すれば、「翠園」と名付けられた庭園に面した、やや大きな庵室だったようである。小谷古蔭の序文に「かくてをりにふれつつ人々つどへることあり」、林夢閑人の俳句の前書きに「青々庵に遊びて鹿島氏及び諸氏とともに大宴す」とあるので、多くの人が集うことができる程の大きさの建物だったことが分かる。この青々庵には、天保頃から明治初年まで、米子に來た文人墨客がしばしば訪れ、あるいは米子内外の風雅を愛する者達が招かれて茶会や漢詩・和歌の会などが催されている。当時の米子の文化サロンのな役割を担った鹿島家の繁栄を象徴するような場所であったと考えられる。

②の「滄廬舎」・③の「虎嘯軒」は何処を指すのかは明らかでないが、あるいは青々庵のように、参加しているいずれかの歌人の邸内にある庵室の類이었다のかもしれない。④は場所が記されていないが、「霜月二日略会 日孝」とあり、この時の歌会は、米子寺町の実成寺の住職であった日孝が同寺で催した可能性が高い。

第三は、二・三期と比べて歌題の種類が多いことである。①②③はそれぞれ、当季の「初冬」・「霰」・「雪」が共通題で全員が詠んでおり、続けて各人が概ね一～三首、別々の題の歌を詠んでいる。兼題と

当座題の区別が書かれていないが、共通題は兼題で各人が予め詠んだ歌を当日提出し歌会を行った後で、改めて採題形式で歌会が続けられ各人が自分の当てた題にに応じてその場で歌を詠んだのかもしれない。共通題は当季の題であり、その他の題も当季の冬の景物が多い。出題は『類題鯉玉集』『類題鴨川集』等に見られる題と重なるものが多く、当季の歌題を中心に、若干の他の季節や恋・雑の歌題も加え、様々な題によって詠歌を試みようとする様子がうかがわれる。その目的はやはり作歌の修練を積み、全国的な類題和歌集への投稿を目指すところにあつたらう。

一方、④は題が共通の三題のみとなっているのが注目される。「埋火」題の一首しか詠んでいない重固を除き、他の八人は三題全て詠んでおり、中には同題で二首詠んでいる場合もある。これはおそらく、この歌会が行われる頃に、歌人として名高い小谷古蔭を鹿島家に招いて和歌の指導をしてもらう話が具体化していたことによるものと思われる。参加者各人が様々な歌題で詠むよりは、全員が共通の三題で歌を詠み、同一の基準で古蔭に添削・批評してもらうことで、それぞれの歌の良し悪しが明らかになり、歌会を催す意義も増すという判断があつたのかもしれない。歌題に関して①③と④とで出題の仕方に大きな違いがある理由は、以上のように考えたい。

この期の鹿島家歌会への参加者は、鹿島家の長行・重正・重好、富商の大谷兼烈、医師の中林武彦・同古樹、神職の門脇重固・僧侶の日孝など、同じ米子町内に住み、もともと鹿島家と交流があつたと思われる者が多い。注意されるのは、『無題歌合集』の書写者である長行が、①には出詠せず②・③でも一首のみ、④でようやく三首詠んでいるということである。嘉永六年当時、長行は二十歳と若く、まだ全国

的な類題和歌集にもその作が見えないことから判断すると、長行はおそらく作歌を初めて日が浅く、あるいは①の下鹿島家の青々庵で行われた歌会に、同族で親しい重好の徳漣で初めて歌会に参加し興味を惹かれて、以後本格的に和歌を詠み始めるようになったのかもしれない。

ない。「無題歌合集」が①の歌会から記録が始まっているのは、長行の歌学がこの時期に本格的に始まったことと対応しているのではないかと考えられるのである。

表2 二期(嘉永六年十一月〜同七年春)

番号	種別	歌数	内訳	月日	場所	題	判者	作者(登場順)
⑤	歌合	三六首	歌合歌二八首、 抜歌八首	記載なし	記載なし	橋上霜	小谷古蔭	鎮喜・重矩・常之・重好・尊蔭・知方・房則・秀年・ 豊正・重固・兼利・薫・長行(一三人)
⑥	歌合	四〇首	歌合歌二四首、 抜歌一六首(古蔭 一〇首・喜蔭六首)	記載なし	記載なし	鷹狩	小谷古蔭・ 佐々木喜蔭	鎮喜・薫・兼利・知方・常之・尊蔭・重好・房則・ 日孝・重固・繁材(一一人)
⑦	歌合	三六首	歌合歌二四首、 抜歌一二首	記載なし	記載なし	閑居夢	小谷古蔭	薫・秀年・常之・尊蔭・鎮喜・繁材・日孝・長行・ 兼利(九人)
⑧	歌合	三一首	歌合歌二二首、 抜歌八首、 古蔭追加一首	記載なし	記載なし	馬	小谷古蔭	常之・薫・鎮喜・日孝・尊蔭・重好・長行・宗武・ 重固・国常・定遠(一一人)
⑨	歌合	三〇首	歌合歌二二首、 抜歌七首、 古蔭追加一首	記載なし	記載なし	冬暁月	小谷古蔭	兼利・日孝・房則・薫・鎮喜・長行・常之・重固・ 宗武(九人)
⑩	歌合	四七首	歌合歌三二首、 抜歌一三首、 古蔭追加二首	記載なし	記載なし	網代・顕恋	小谷古蔭	常之・薫・鎮喜・重好・重固・房則・長行・兼利・ 日孝・豊正・宗武・秀年・国常(一三人)
⑪	歌合	五六首	歌合歌三六首、 抜歌一九首、 古蔭追加一首	末尾に 「嘉永六と せのうし」	記載なし	埋火・寄山恋	小谷古蔭	重固・貞明・重好・薫・兼利・鎮喜・長行・信久・ 常之・秀年・房則・宗武・豊正(一三人)
⑫	歌合	四九首	歌合歌三八首、 抜歌一〇首、 古蔭追加一首	記載なし	記載なし	立春・社頭松	小谷古蔭	兼利・常之・薫・秀年・美堅・豊正・宗武・長行・ 秀興・重固・国常・鎮喜(一二人)

番号	種別	歌数	内訳	月日	場所	題	判者	作者(登場順)
⑬	歌合	四二首	歌合歌三二首、 抜歌一〇首	記載なし	記載なし	雪中若菜・ 船上山	小谷古蔭	鎮喜・重好・常之・薫・兼利・重固・長行・美堅・ 豊正・宗武(一〇人)
⑭	歌合	七一首	歌合歌五二首、 抜歌一九首	記載なし	記載なし	山家鶯・春恋	小谷古蔭	鎮喜・重好・兼利・薫・宗武・長行・常之・重固・ 豊正・繁材・名知らず・美堅(一二人)
⑮	歌合	八五首	歌合歌六二首、 抜歌二三首	記載なし	記載なし	田家梅・鐘	小谷古蔭	常之・重好・正俊・豊正・兼利・国常・宗武・長行・ 重固・薫・繁材・知方・鎮喜・光道・美堅(一五人)

この期の特徴は、第一に、一期の活動がすべて歌会であったのに対し、小谷古蔭を判者として歌合を行うようになったことである。そのきっかけは一期の④にある。第二節で述べたように、これは当初歌会として行われたが、後日歌合に編み直され、古蔭が勝負を定め判詞を書き、選り歌を九首選んだ。以後、この歌合の形が定着していく。

第二に、歌合の行われた場所が示されないようになるが、これはその場所が固定化したため、表記する必要がなくなったことを意味するのではないかと考えられる。古蔭の米子滞在中の宿所が下鹿島家の青々庵であったと見られることは先に述べたが、そうであれば古蔭を判者に迎えての歌合も青々庵で行われたと見るのが自然である。この期は月日もまた記されないようになるが、嘉永六年十一月から翌年一、二月までの三、四ヶ月に十一度の歌合が行われており、月に三、四回の頻度で歌人達が集まっているところから、当時の米子歌壇の活況が伝わってくる。

第三に、参加歌人が多くなり、総歌数が増えるだけでなく、歌人の内訳に変化が見られる。一期に参加していた歌人のうち、兼烈・建比古・古樹・武彦・冬人はこの期以後参加しなくなる。(ただし、冬人は全期を通じて③の一回のみの参加、武彦は後に三期の⑰⑳で判者

として参加)一方、二期を通じて全ての歌合に参加している鎮喜・薫を中心として、他にも尊蔭・房則・秀年・宗武等この期に初めて参加する歌人は十八人に及ぶ。(ただし、その内の一人は「名知らず」しかも、彼ら十八人の中で続く三期にも歌合に参加し続けるのは四人にすぎない。おそらく、小谷古蔭の歌人としての名声を慕って鹿島家の歌合に人々が集まり、一時期活況を呈したが、古蔭が米子を去った後は参加しない者が増えたということなのかもしれない。

古蔭はこの期間(嘉永六年十一月～翌七年一、二月頃)下鹿島家に滞在していたと見られ、⑤⑥⑦の十一度の歌合に関わり、その全てで判者を務めている。(ただし⑧は佐々木喜蔭と両判)先述した、④の歌合を歌合に編み直したものは、いわゆる机上の歌合であるが、⑤⑥⑦は実際に鹿島家で歌合が行われていると見られる。そのことは、⑩の末尾に長行が古蔭の「口上」を書き記していることから確認できると、以下引用すると、

口上をしるす

こたびの歌合は心のとまる趣向いと多し。依りて作者のみこゝろもかへりみず、無礼の事をもいひ、余りに直し過ぎたるも多く侍り。抑歌合は勝敗を論ずる物なれば、直して勝を譲りては負け

る方々腹ふくらし給ふべけれど、玉を捨て瓦を拾ひ出づべきならねば成るべし。かくて今より後は、直したりとも玉のひゞきあるを秀逸と定むべし。こは稽古巻なれば、例にたがへりとして異論あるべからず。

古蔭
歌合の場で古蔭が口頭で語った内容を、長行が歌合の本文の後に文語体で書き記したものとされるが、これによると古蔭は作者達を前にして歌の良し悪しを批評し、添削した後に番われた左右の歌の勝負を裁定していることになる。添削を得た歌がそうでない歌に勝つのは不公平なように見えるから、判者の立場から古蔭が弁解したのであろう。

表3 三期(嘉永七年九月〜安政二年正月)

番号	種別	歌数	内訳	年月	場所	題	判者	作者(登場順)
②⑩	歌合	一一四首	歌合歌七六首、 抜歌三八首(喜蔭 二一首・武彦一七首)	記載なし	記載なし	立春・水鶏・ 擣衣・霰・ 百舌鳥	佐々木喜蔭・ 小林武彦	兼利・千代蔭・秀年・重好・長行・美堅・飛入・ 幸雄・信久(九人)
①⑨	歌合	七八首	歌合歌四六首、 抜歌三二首(喜蔭 一五首・武彦一七首)	記載なし	記載なし	朝落葉・ 炭竈・橋	佐々木喜蔭・ 小林武彦	兼利・長行・千代蔭・美堅・秀年・重好・金原 (七人)
①⑧	歌合	八五首	歌合歌五三首、 抜歌三二首(喜蔭 一五首・武彦一七首)	記載なし	記載なし	青・黄・赤・ 白・黒	佐々木喜蔭・ 小林武彦	秀年・貞明・美堅・幸雄・兼利・金原・長行・ 信久・千代蔭・一斎(一〇人)
①⑦	歌合	八〇首	歌合歌五四首、 抜歌二六首(喜蔭 一三首・武彦一三首)	記載なし	記載なし	雪中眺望・ 山家冬・ 水仙花・海	佐々木喜蔭・ 小林武彦	長行・秀年・兼利・千代蔭・美堅・重好・飛入 (七人)
①⑥	歌合	三五首	歌合歌二五首、 抜歌一〇首	九月末	記載なし	蟋蟀・菊・ 初雪	佐々木喜蔭	長行・美堅・兼利・千代蔭(四人)

この期は一期の歌会と比べると、一回の歌合で歌題は一つか二つであり大幅に減少している。⑤〜⑨には「兼題」とあり歌題は一つであるが、⑩〜⑮にはその表記がなくなり歌題は二題で当季が一題、恋か雑が一題となる。あるいは⑩を境にして歌合が当座題で行われるようになったのだとすれば、参加者達にとっては作歌の難易度が増したことになる。この期は歌合を行うことで詠出した歌の優劣を明らかにし、参加する歌人達が互いに和歌の技量を高め合い、より真剣な創作が行われるようになったものと見られる。判者の古蔭も、ただ勝負を付けるだけでなく、判詞はないが「口上」にあったように率直で厳しい評価を与え、添削を施し秀逸な歌を選抜した上で、しばしば自ら同

題で詠んだ歌を見本として示している。まさに宗匠としての振る舞いであるが、この時期鹿島家に集った歌人達は古蔭の指導の下、切磋琢磨しつつ全国的な類題和歌集への投稿を目指していたものと考えられる。

この期は、二期で歌合の判者を務めていた小谷古蔭が米子を去り、米子歌壇の有力歌人であった佐々木喜蔭・中林武彦が鹿島家歌合で判者を担うようになった時期である。喜蔭は鹿島家の歌会・歌合に作者としては参加していないものの、すでに二期の歌合⑥で古蔭と共に判者となっており、武彦は一期の歌会①・③に作者として参加していた。稿者が第三節で述べたように、この二人は当時の類題和歌集に比較的多くの歌を採られており、米子歌壇の中でも重んじられた存在であったと考えられる。

この期は、二期の歌合⑫以降、数ヶ月間鹿島家で行われていなかった歌合が、嘉永七年（一八五四）九月末に再開し、翌年正月までに五度の歌合が行われている。参加する人数は減少し、一期・二期を通じて参加していた歌人のうち、重固・豊正・常之の名が見られなくなる。また、二期から参加し始めた歌人は、鎮喜・薫・宗武等その大部分が三期にはその名が見えなくなる。千代蔭・金原のように、この期から参加し始める者もいるが、数は少ない。しかし三期の中心となっているのは、長行・重好・秀年など類題和歌集に歌を採られている歌人達であり、詠歌への意欲は強かったと見られる。

この期は参加歌人の減少（二期平均二・七人、三期平均七・四人）に比して、一回の歌合で詠まれる歌の数が多い（二期平均三三・八首、三期平均五〇・八首）のは、歌題を三〜五題に増やし、各歌人が題毎に何首も歌を詠んでいることが関係している。⑬の歌合で「青・黄・

赤・白・黒」の珍しい題で歌を詠んでいるのも注目される。この期だけの特徴であるが、⑬と⑭の歌合には「飛入」の作者も参加している。⑮だけは兼題の歌合とあるが、当初は予定になかった者がにわかに参加することになったのであるうか。この期の歌合は、小數で身内の・同士のな性格が強く、割合に自由な雰囲気で歌が詠まれていたように思われる。

六、おわりに

以上、本稿では、山陰歴史館蔵『無題歌合集』について調査・分析した内容を報告した。初めに述べたように、本書については平成二十二年に原豊二氏がその概要を紹介され、今まで知られていなかった米子歌人を広く抽出し、幕末の米子歌壇の活動状況を把握する上で重要な資料であることを指摘されていた。その後、稿者も本書について調べる必要性を感じながら、一千首余りの分量の多さや、書写者・長行の癖の強い文字の読みにくさなどのため、なかなか手がつけられずにいたが、平成二十八年十二月から、NHK学園古文書講師の中宏氏の勧めにより、稿者の所属する「米子高専古文書の会」で本書の解説が始まり、先般その作業が終了した。本稿はその成果に基づき、『無題歌合集』の資料としての性格と内容について論じ、また鹿島家で行われた二十度の歌会・歌合を対象に、参加した歌人の略歴や米子歌壇の和歌活動の状況について基礎的な調査と考察を試みた。その結果を以下略述する。

本書は鹿島本家九代・長行が主に鹿島家で行われた歌会・歌合を記録しているが、公開や二次利用を意図したものではなく、私的な備忘録といった性格の書物である。長行は嘉永六年から安政年間

(一八五三—一八五九)にかけて多くの和歌資料を残しており、本書もその中の一つに位置づけられる。これらを総合的に利用すること、幕末の米子歌壇の活動を把握し、また当時の地方歌人と全国的な類題和歌集との関わりの実態を知ることが可能になる。

本書に記録された鹿島家の和歌活動は、その実態から次の三期に分けて把握することが妥当である。一期は嘉永六年十月一日から十一月二日で、「歌会」が、参加する歌人の持ち回りで開く場所を決めて行われていたと考えられる時期である。参加者はもともと鹿島家と交流の深い者が多く、小規模な歌会で様々な歌題を試み、詠歌の技量の向上を目指していたと考えられる。二期は嘉永六年十一月から翌年春にかけてで、小谷古蔭を指導者に迎え、「歌合」が行われた時期である。おそらく下鹿島家の青々庵に場所を固定して多くの参加者が集い、三、四か月の間に十一度も歌合が開かれ、米子歌壇は活況を呈した。この時期は歌合を行うことで歌人たちが切磋琢磨し、より真剣な和歌の創作が行われるようになったと見られ、古蔭も率直かつ厳しい態度で彼らの指導に当たっていた様子がうかがわれる。三期は嘉永七年九月から安政二年正月にかけてで、古蔭が米子を去った後、しばらく行われていなかった歌合が、佐々木喜蔭・中林武彦を判者として再開された時期である。参加者の数は少なくなるが、身内の・同士のな自由な雰囲気のもとで歌合が行われており、珍しい歌題も試みている。

このように、本稿では『無題歌合集』の資料としての性格と内容については一通り明らかにできたとと思われるが、参加歌人については調査が十分に及ばなかった点も多い。本稿では主に、当時の類題和歌集の作者姓名録を利用して歌人の略歴を把握していたが、今後、鹿島家の和歌資料の解説を進めることにより、和歌草稿や短冊の詞書の記述

等から該当人物の特定につなげられるケースが出てくることが考えられる。

また、本稿では各歌人の類題和歌集への入集状況について言及しながら、鹿島家歌会・歌合で詠まれた歌がどの程度、どのような形で当時の類題集に採られているかの調査ができなかった。鹿島家の和歌活動の小さな目的として、類題集への投稿が想定される以上、これは必須の作業であろう。歌題の設定がどのようになされているか、判者が歌人の歌をどのように添削しているか分析することも、有効なアプローチであると思われる。何よりも、鹿島家の歌会・歌合で詠まれた和歌の表現や歌風についての考察がなされるべきであるが、今はその余裕がない。これらの歌題についてはいずれ別稿を用意し、改めて論じることとしたい。

注

- (1) 原豊二氏「幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために―」『山陰研究』第三号、平成二三年(二二)号。
- (2) 以下、鹿島家と鹿島重好については、船越元四郎氏「鹿島家」(『米子の歴史と人物』立花書院、昭和五七年三月)・『米子市史 全(複製版)』(名著出版、昭和四八年一〇月)・『米子商業史』(米子市・米子商工会議所・米子市商店街連合会、平成二年三月)・『新修米子市史 第二巻通史篇近世』(米子市、平成一六年三月)・『鳥取県大百科事典』(新日本海新聞社、昭和五九年一月)の「鹿島氏」(船越元四郎氏)・「鹿島重正」(畠中弘氏)・「鹿島重好」(松尾陽吉氏)の項目を参照した。
- (3) 本居大平の「教子名簿」伯耆国の項に「米子 鹿島治郎右衛門 長知」とある。『国学者伝記集成』二巻(名著刊行会、昭和五三年八月)参照。

- (4) 『類題稲葉集』の序文には、中島宜門が撰集に当たったとき「嘉永の今に至るまで此国の歌人ども多方は洩らさず」と、広く鳥取藩内の歌人から歌を集めた事情が述べられている。
- (5) この歌合については、渡邊健・米子高専古文書の会「影印・翻刻 嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」（『米子工業高等専門学校研究報告』第五三号、平成三〇年二月）の解題を参照されたい。
- (6) 以下、小谷古蔭の人物と経歴については、『鳥取藩史』第一巻「藩士列伝」、「鳥取県大百科事典」、山本嘉祥氏『近世和歌史論』第二部第五章「類題鯁玉集の出版」（文教図書出版、昭和三十三年一月）↓修正復刻版バルトス社、平成四年一〇月）を参照した。
- (7) 『類題鴨川集』は、加納諸平と同じ本居大平門の長澤伴雄が、諸平の『類題鯁玉集』の成功に倣って編集した類題和歌集である。『鯁玉集』と同様、全国の歌人が挙って歌を投稿するところとなり、嘉永元年（二八四八）の太郎集から同七年（二八五四）の五郎集まで次々と刊行されて人気を博した。伴雄と諸平が疎隔を生じたため、柿園派と目された歌人達は入集を阻まれていた。山本嘉祥氏『近世和歌史論』を参照。
- (8) 「鹿島家青々庵之書画帖」は翻刻が『新修米子市史』第九巻資料編近世二（平成一四年三月）に掲載されており、「米子町史編さん資料 米子市役所蔵」と記されているが、原資料は未見である。
- (9) 「いまはとて」の歌は『採風集二編料』に収められており、それによれば安政四年（一八五七）以前の作ということになる。
- (10) 山陰歴史館所蔵の「鹿島美彦家資料」の中にある。整理番号は和歌短冊帖は七一一〇、短冊は同C二二〇。
- (11) 『因伯名勝和歌集』（米子今井書店、昭和二二年五月）巻末の作者解説による。
- (12) 鹿島重正四十賀短冊帖は山陰歴史館所蔵「鹿島美彦家資料」整理番号七一九、重尚四十賀の折の制作と見られる短冊帖は同七一一〇。
- (13) 拙稿「鹿島重好歌集」について」（『山陰研究』第一一号、平成三一年一二月）。
- (14) 鹿島本家所蔵短冊帖に、明治二五年の重好の死に際して長行が詠んだ、重好君はいとけなきよりしたしき友なりしに、こたび身まかりけるを悲しみて
- 竹馬のむかしをしたふこゝろあらば死出の山路をなにそぐらむ
という歌がある。重好の方が歌人としての活動開始時期が早いこと、また二人の親密な交際を考えると、長行を歌道に慫慂したのはおそらく重好であったのではないかと考えられる。
- (15) 『新修米子市史 第二巻通史編近世』（平成一六年三月）第二編第一章第一節「国学と漢学の諸相」参照。
- (16) 『荒尾駒喜代元家来米子詰家来書上』（米子城資料第三集、米子市山陰歴史館編集発行、平成五年三月）の「片尾純藏家」の項による。
- (17) 「片岡安筆」は『鴨川集』四郎集作者姓名録の誤りで、歌集の作者表記では「片尾常之」となっている。
- (18) 門脇重仁家蔵「御系図」による。
- (19) 注(11)に同じ。

〔付記1〕

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九〜二〇二一年度、代表・野本瑠美）による研究成果の一部である。

〔付記2〕

本稿で取り上げた資料の翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。

- 1 漢字・仮名の表記は現行の字体によった。

- 2 読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。
- 3 繰り返し記号「、」「く」は原文のままとした。
- 4 「ハ・ニ・ミ・ノ」の片仮名表記は、現行の仮名に改めた。
- 5 仮名遣いは、歴史的仮名遣いと違うところも原文のままとした。
- 6 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。

〔付記3〕

本稿において、主な類題和歌集は以下を参照した。

- ・朝倉治彦氏監修 中澤伸弘氏・宮崎和廣氏編『類題和歌 鯨玉・鴨川集一〜六』（クレス出版、平成一八年四月）
- ・『類題採風集』二編上・下 刈谷市立刈谷図書館蔵 国文学研究資料館紙焼三〇―三二八―四 C五六二三
- ・『類題和歌清渚集』上・下 刈谷市立刈谷図書館蔵 国文学研究資料館紙焼三〇―三二七―五 C五六一八
- ・『類題千船集』初編〜三編各上下 麗澤大学附属図書館蔵 国文学研究資料館紙焼二二九―三三六 C八八五五
- ・『近世名家歌集類題』一〜七 刈谷市立刈谷図書館蔵 国文学研究資料館紙焼三〇―三三三―五 C五六八二

〔付記4〕

貴重資料の調査・掲載をご許可いただいた米子市立山陰歴史館、米子市立図書館、鹿島恒勇氏、鹿島美彦氏に御礼申し上げます。

On “Mudai utaawase – syu” owned by Municipal Yonago Historical-Museum

Watanabe Ken

(National Institute of Technology, Yonago College Department of Liberal Arts)

[Abstract]

This paper will describe the result of survey and study on “Mudai utaawase – syu” owned by Municipal Yonago Historical-Museum. This book, which was formerly possessed by Kashima Tsuneo, has been pointed out that it is an important literal material as for grasping the substance of the activity of Yonago poetry circle in the end of the Edo era.

This book is a manuscript which compiles 20 times of poetry parties or poetry contests held in Kashima family from 1853 to 1855, and it contains more than 1,000 poems. From 2016 “Study group for ancient documents in National Institute of Technology, Yonago College” which the author belongs to, advanced the deciphering this book, and recently the work was finished. In this paper, based on the achievement of this work, the author attempted to analyze the activities such as poetry parties or poetry contests held in the Kashima family dividing them into three terms, and made a fundamental research and study on the attributes of the participating poets and the situation of their activities.

Keywords : The Kashima family, Kashima Nagayuki, Yonago poetry circle, Ruidai Waka-syu